

## 松原市教育委員会 10月定例会 議事録

1. 日 時 令和5年10月18日(水) 午後3時00分

2. 場 所 松原市役所3階 301会議室

3. 付議事件等

- (1) その他 ○令和5年度以降の二十歳の集いについて  
○令和5年度全国学力・学習状況調査の結果について

出席委員 美濃教育長 田中教育長職務代理者 和田教育委員 佐野教育委員  
比嘉教育委員 新田教育委員

事務局 山森学校教育部長  
小玉教育総務部次長兼文化財課長 矢野学校教育部次長  
彦阪教育政策課長 田中教育総務課長 松山教育総務部参事  
宮本学校給食課長 北田教育総務部参事 猪俣教職員課長  
長尾教育推進課長 矢口地域教育課長 大西教育研修センター長

美濃教育長

定刻前ではありますけれども、全員おそろいのようなので、会議に入りたいと思います。

ただいまの出席委員は5名でございます。私を含めまして定足数に達しておりますので、会議は成立しております。

(開会宣言 午後3時00分)

これより10月定例教育委員会を開催いたします。

なお、岡本教育総務部長が欠席との届出がございましたので、ご報告をいたします。

次に、本日の会議録の署名委員を指名いたします。

委員会会議規則第17条第2項の規定により、新田委員にお願いしたいと思います。

よろしく申し上げます。

新田委員

はい。

美濃教育長

初めに、教育長報告を行います。

お手元の資料に基づき報告をさせていただきます。

前回の教育委員会が9月27日だったので少し期間が短いので、報告事項も少し少なめではあるんですけども、まずは9月11日から始まりました令和5年松原市議会第3回定例会が10月6日に終了をいたしました。前回の会議のときにも若干申し上げたんですけども、教育関連の質問事項が非常に多くありまして、教職員の働き方改革であるとか、地域ぐるみの学校支援、ISSの推進、不登校生の居場所づくり、また小規模化している学校の適正規模についてというようなことについても質問がございました。

それから、10月に入ってからなんですが、小学校の運動会がございました。この日は雨が非常に強くて、一部プログラムを短縮して体育館でやったというところも幾つかございました。ほとんどの学校が10月3日ないし4日に延期をして行ったということでございます。

それから、10月5日には校長会議がございました。

以上、短いですが、ご報告とさせていただきます。

何かご質問ありますでしょうか。

和田委員

質問ではないんですが、小学校の運動会の件で、雨でしたので、中央小学校に私の孫が通っているんですけども、ちょうど中止になったの

で学年演技だけ体育館で見せていただいたんですね。各学年、見せていただくという形になりました。学年ごとに保護者が入って演技を見たんですけれども、結局あの方式はすごくいいなと思いました。もし雨の場合にはそういう形であらかじめ、例えば1年生は9時から、2年生は9時半からというような形で、日曜日しか子供たちの様子が見られない保護者もおられますので、そういう方式はぜひ今後検討していただけたらと思いますので、よろしくをお願いします。

以上です。

美濃教育長

ありがとうございます。

それでは、議事に入る前に、小・中学校の現在の状況について、事務局から報告をお願いします。

山森学校教育  
部長

小・中学校の状況ということでございますが、先ほど教育長から少しございました運動会の件につきましては、我々、練習も含めて、小学校の運動会は10月1日でしたので、9月での暑さが非常に気になっておりました。結果的に言えば10月3日、4日に延期された中で非常に涼しかったというのが結果でした。これはやっぱり9月の末頃までは暑さを心配したんですけれども、1週間たてば季節が本当にぐっと進んだような感じになりまして、結果的には先ほど申したとおり涼しい中で子供たち、元気に頑張ったんですけれども、校長会ではやはり異常気象が続いていきますので、できれば1週間ぐらいは後に回したほうが確実な涼しさというか、体調管理の中で練習も含めてできるということは話をしておりますので、次年度は、今年度より小・中学校とも1週間程度後のほうにずらしながら練習したり、当日を迎えていくということで考えておりますことをまずご報告しておきます。

先ほど和田委員からございました方法につきましては、市教委のほうにもああいうやり方がよかったという声も電話で入っておったりしました。ただ、学校によっては、この雨の中、風邪引かすんかというような声がすぐに入ってきて、早う帰さんかというようなことと、今日しか見られへん親が来ているねんからというようなせめぎ合いの中での判断で、管理職に聞くと、そこはかなりは難しい判断を迫られたなということで、その足並みはなかなかそろわなかったんですけれども、今貴重なご意見いただきましたので、これはまた校長会で共有をしていきたいと思っています。

続きまして、行事で続きますと修学旅行が10月の後半から11月の後半

にかけまして、小学校の13校。小学校2校は既に実施をしておりますので、13校が広島に修学旅行に出発すると、このようになっております。

あと、やはり感染症のほうぐずぐずというのか、爆発的にたくさんの学級が一度に学級閉鎖ということはないんですけども、1つのクラスでやはりインフルエンザが出て、終わったかなと思ったら、次、2学級出てというようなことは少し続いておりますので、早め早めに閉じながら、かつ子供たちの学習の保障ことも頭に入れながら、今後も対応していきたいなど、このように思っております。

いずれにしても、取組目白押しで非常に子供たちにとっては充実した2学期になってほしいと思っておりますし、そのようになりましますように、教育委員会としましても学校を支援しながらやっていきたいと、このように思っております。

以上でございます。

美濃教育長

ただいまの件について何かご意見、ご質問はございませんでしょうか。

田中委員

感染症なんですけれども、インフルがメインですか。

山森学校教育  
部長

はっきりとではない、印象としましては9月の中旬はまだコロナがぼつぼつとはやっておったんですが、今はほとんどインフルですね。

田中委員

そうなんですか。

山森学校教育  
部長

はい。ですので、今の閉鎖状況でいうと、先週も閉鎖が少しあったんですけども、これもインフルエンザでした。

田中委員

というのが、自分がちょっと関わっている障害者施設のほうが、先週ぐらいからコロナが爆発的に発生しまして、ちょっと閉鎖せざるを得ないような状態になっていましたのでお聞きしたかったんです。すみません。

山森学校教育  
部長

ちょっと補足だけいいですか。割とぼんと高熱が出て、コロナかインフルエンザかちょっと判断つきにくいんですけども、病院に行くとインフルエンザの検査は割とぼんとやられるということで、インフルエンザのほうが多くなっているのかなというふうに思いますけれども。

あと、発熱等で休んでいる子供たちの数を見ますと、決して少ないと

は言えない数ですので、その中にはコロナの子供たちも、検査はしていないけれども、いてるのかなと感じております。そんな状況です。

田中委員

ありがとうございます。

美濃教育長

ほかに何かございますか。よろしいですか。

各 委 員

なし。

美濃教育長

では、ないように見受けられますので、これより本日の議事に入ります。

本日の議事は、その他案件が2件となっています。

それでは、その他案件、最初が令和5年度以降の二十歳の集いについてを議題といたします。

事務局より説明を求めます。

矢口地域教育  
課長

令和5年度松原市二十歳の集い式典についてご説明いたします。

日程につきましては、令和6年1月8日祝日、松原市文化会館で開催します。対象者は、平成15年4月2日から平成16年4月1日生まれの1,168名となっております。式典方法につきましては、中学校区を2つのグループに分けた2部制で行います。これにつきましては、来年度以降も継続し、同じ方法で実施する予定です。

今年度の詳細につきましては、第1部を松中、三中、五中の合計544人、9時受付の9時半開始。第2部を二中、四中、六中、七中の4中学合計615人で、10時45分受付の11時15分開式で予定しております。

以上となります。

美濃教育長

ただいまの件について何かご意見、ご質問はございますでしょうか。よろしいですか。

各 委 員

なし。

美濃教育長

ないように見受けられますので、令和5年度の二十歳の集いについての説明は以上となります。

続きまして、令和5年度全国学力・学習状況調査の結果についての説明を求めます。

大西教育研修  
センター長

令和5年4月18日に実施しました全国学力・学習状況調査の結果についてご報告いたします。

実施教科は、小学校は国語、算数の2教科、中学校は国語、数学科、英語科の3教科となっております。

それでは、概況をお伝えします。

まず、資料の1ページですけれども、正答の状況をご覧ください。小・中学校全ての教科において、松原市の平均正答率は、全国、大阪府の正答率を下回る結果でした。無答率についても、中学校の国語が府よりよい結果で、そのほかは府、国よりも無答率が高い結果となりました。

次に、2ページの2、平均正答率対全国比推移をご覧ください。

今年度の全国平均と比べた松原市の平均正答率は、昨年度と比べまして小学校の国語、算数、中学校の国語、数学におきまして全国との差は縮まっていると。松原市としては上昇しております。中学校英語は、3年前に比べて下降しております。

これらの結果を委員会内で詳しく分析していきますと、2つの課題が見えてきました。1つは、各教科の正答数の分布を見ますと、昨年度よりは、昨年度、2つの山があるということをお伝えしましたけれども、昨年度より改善はされてきているんですが、まだ低位層の子供たちが多いという実態があることです。

もう一つですけれども、問題等を読み解く力に課題が見られるということが分析して見えてきました。

この資料にはありませんが、児童質問紙も行っています。児童質問紙の結果からなんですが、各教科で学んだことを生かしながら自分の考えをまとめる活動を行っていましたかという質問があるんですけれども、これに肯定的な回答をする子供は、国や府と比べて高いという結果でした。子供自身が学習内容とそこから考えたことを振り返る活動を行うことで、各教科の学びを生き方につなげていこうとしている授業を先生たちが行っているんだなということがここから分かると考えています。

また、先生はあなたのよいところを認めてくれるという質問があるんですが、それに肯定的に回答した子供の割合も国や府に比べて高いことから、教職員と子供の信頼関係が構築されてきているということも考えられます。

そのほかに特徴的な質問紙からでいきますと、人が困っているときは進んで助けているとか、人の役に立つ人間になりたいと思うといった項目は府と比べて高い結果となっており、松原の教育が、これまでやって

きた教育がそこに反映されているのかなというふうに感じております。

以上のことやこの間の取組も踏まえ、今後も教育委員会は、2つの方向性で学校、また教職員に関わっていこうと考えています。

1つ目ですけれども、今年度当初から取り組んでいる、先月も推進課長から話がありましたけれども、まったら学びアシストの取組をさらに推進していくことです。具体的には、低位層の子供たちが安心して間違えることのできる学習集団づくり、それから、その子供たちが分かったと思えるような授業づくり、それから、その子供たちが学びを定着させる補充学習の体制づくりを行うことです。そのために教育委員会も、テスト結果の分析であったりとか、校内の会議への参加、また日常の授業づくりに関わり、しんどい状況の子供たちのアシストを共にやっていきたいと考えています。

また、キャリア教育も活用しながら、子供たちが今の学びの意味を実感し、自分の将来についての見通しを持てるようにし、子供たちの学びへの意欲を高めていきたいと思えます。

2つ目です。2つ目は、松原市で大切にされてきた子供たち同士のつながりを深め、豊かな心と確かな学力を育んでいく教育活動を展開するために、これまで以上に意識して、教職員が子供を真ん中に据えての議論をすること、それから、子供の姿で検証するという教職員集団づくりを行うとともに、子供に真摯に向き合い続ける教職員の育成に委員会として努めていきたいというふうに考えています。

以上のような分析と今後の方向性につきまして、10月の校長会、また教頭会にて各種小・中学校の管理職にお伝えしました。今週から各校においての取組の進捗や課題について、指導主事が各校に出向いてヒアリングをスタートさせたところです。

全国学力・学習状況調査の今年度の結果につきましては、松原市のホームページに10月13日に公開しておりますので、またご覧ください。

以上でございます。

美濃教育長

ありがとうございました。

ただいまの件について何かご意見、ご質問はございませんでしょうか。どうぞ。

新田委員

まず、事前に頂いていた資料が1ページ、2ページの生徒の状況と学習状況調査、正答回答率の全国比の推移のグラフのみでした。今、後半でほとんどの時間を使っていた質問紙の内容のものなどの資料が

なぜ私たちに事前に頂けなかったのかなということと、その質問紙の内容に関して、だから、どのような質問がされているかというのは分からないんですね。もちろん去年のものをネットで検索すれば出てくるわけなんですけれども。

例えば最後のところに、子供同士のつながりをとか、改めて子供を中心という話がありましたけれども、じゃ、今回のこのテストの結果を子供たち自身はどういうふうに取り受けているとか、そんなことを直接的にストレートに聞く手段というのはないのかな。

当然ご存じだと思いますけれども、釈迦に説法で大変申し訳ないんですが、今年の4月、こども基本法が施行されて、子供たち自身が自分たちを取り巻く施策に対してきちんと意見をすることが法律で決まっているわけじゃないですか。例えば、今回のこのテストを受けて、学校に対して何か不満とかないんですかと直接的に聞くということをされたらどうかと思うんですけれども、そのあたりは、質問紙にはそのような意図を持っている質問とかあるんですか。このあたりの情報が開示されていないのでちょっとその辺が分からない。

あと、去年と比べると、去年だと10月5日の段階で教育委員会のウェブサイトにもその結果が更新されているわけなんですけれども、今回、2週間後回しになっているというか、後ろにずれているのは、これはテストを実施されたタイミングが遅かったのか、何らかの分析に時間がかかってしまったのか、この2週間のタイムラグというのは何が原因なのか、ちょっとそれを教えてもらえますか。

長尾教育推進  
課長

まず、私のほうからは、質問紙についてお答えをさせていただきます。質問紙は、小学校では約60問ですね。59問ほどの質問があります。実は回答するだけでも随分時間がかかるんですが、先ほど委員おっしゃられたような、このテストについての問いというのがございます。例えば国語、算数についてテストを受けるわけなんですけれども、このテストは時間はどうでしたかとか、難しかったですかみたいな、そのような質問があります。あるいは、ふだんの国語の授業に学習したことは将来役に立つと思いますか。算数も同じです。それから、国語の授業で、言葉には相手との好ましい関係をつくる働きがあることについて学んでいますか。あるいはタブレットの活用状況はどうですかみたいな、ふだんの授業について問う項目が、そうですね、20問ほどはあるのかなというふうに思っております。

特徴的なところでいいますと、中学校の例えば道徳なんか学習指導



要領の改訂で随分変わったんですけども、経年的な変化で申しますと、道徳の授業では自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいますかというような感じ、考えて議論する能力がどのくらい深まっているのかという問いに関しましてですと、平成28年度が「当てはまる」と肯定的に感じた松原の生徒は30%弱、28%だったのに対して、「当てはまる」と肯定的に回答したのが45.6%と非常に大きな伸びを示しております。

そのほか、経年で比較してみますと、子供たちの回答状況は大変よいものが多いというのが傾向とっております。

以上でございます。

美濃教育長

どうぞ。

大西教育研修  
センター長

ホームページ公開が昨年度より1週間ほど遅れたという理由ですけども、準備はしておったんですけども、ちょっとアップするのが遅れてしまいました。

新田委員

分かりました。2週間。1週間じゃなくて2週間。

大西教育研修  
センター長

13日ということでございます。

それから、子供の実感とかを吸い上げたらどうだというご意見、本当にそうだと思っています。全国学テ、小学校では6年生、中学校では3年生が受ける児童質問紙というのも一つの手がかりだと思うんですけども、各校で毎月であったりとか、毎学期であったりとか、いじめ等も把握するために生活アンケートという形で行っているアンケートであったりとか、そこには教員との関係性であったりとか、授業のことであったりとかも学校でそういう尋ねるような項目もありますし、何よりも日常からそういったところで回答した子供たちを把握して、やっぱりちゃんと聞き出してケアして、児童・生徒と教員が話すというようなことをやっぱり、今そこら辺の子供との関係をつないでいくという、教員が関係をつくっていくということは非常に重要やなど。いろんな生徒指導事象とかを見ている、やっぱりそこに信頼関係があるのと、そこが築かれていない部分では大きく違ってきますので、あらゆるいろんな場面を通じて子供の実感等をつかみ、次の教育活動に生かしていくということは、今後もいろんな場面でやっていきたいなというふうに考えています。

以上でございます。

新田委員

先ほどの質問紙、59問ほどの質問があるということだったんですけれども、何らかのいわゆる自由回答や記述で回答できるものはあるんですか。そうじゃなくて、それだけの質問数があるので、先ほどの思う、思わない、どちらでもないみたいな、そういうものなのか、それとも何らか本当の意味で、そこに記述されていないようなことに関しても意見を言えるような仕組みがあったりするんですか。

長尾教育推進  
課長

質問紙のほうは、大きくは選択式のみでございます。選択肢の数については、その設問ごとに異なることが多いです。多いのは当てはまる、どちらかといえば当てはまる、どちらかという当てはまらない、当てはまらない、その他、無回答みたいな感じではありますが、もっと細かく細分化された質問のときもあります。時間を問うようなときだとか、回数を問うようなときというのは、選択肢が10個になったりするようなこともあります。

自由回答をする、自由記述をするというのは用意されていない状況です。

以上でございます。

新田委員

それでいうと当然行政側というか、教育委員会側から必要としているデータを取るための質問は当然用意されていて、もっと上から下りてきているものだとということだと思ってしまうんですけれども、そもそもの教育行政に対しての子供たちが意見を言える仕組みというのとはちょっと、自由回答でない以上は違うかなと。例えばそれはこの取組自体が大阪府がやっているものですよとか、そういうところは置いておいたとして、何らかやっぱ子供たちが自分たちで意見を述べる場というのは今後あってもいいんじゃないかなとは思うんですね。例えばそれが今回の学テみたいなものだったとしたら、一応何か思うことありますかみたいな自由回答があれば、書ける欄があれば書く子は書くだろうし、ない子はないだろうしということで、今後そういうところは松原市として追加でみたいなものひとつ検討の余地があるんじゃないかなということでまた検討いただけたらと思います。

山森学校教育  
部長

ありがとうございます。子供の意見表明というのはこれからとても大事だなというふうに我々も認識をしております。

学テのほうにつきましては、国実施の中でアンケートの様式というの

は今、担当が申しあげましたように、マークシートが全てなんです。我々がふだん子供たちの生の声をつかみますのは、先ほどセンター長からありましたように、学期ごとの生活アンケート、友人関係はどうだとか、学校の授業はどうだとか、先生とのつながりはどうだとかと、こういうことにつきましてアンケートを定期的にとっておくと。ここには自由記述欄を当然入れておきまして、自分がふだんこういうことで困っているというようなことがアンケートからなかなか、マークシートだけでは見えないところを記述で取っていると。

各校のシステムとしましては、私も学校現場におったときに同じように指示をしましたが、各全担任が全てこれに目を当然通します。通した中で気になる子供たちについては面談等もしながらですけれども、最後、管理職まで気になる意見だけでいいから、コピーを上げてきてくださいということで、管理職も全体で把握をしていくと、こういうことになります。

もう一つ、保護者につきまして、保護者のほうも、当然学校の運営だとか、学校の在り方について意見を表明する場が必要でございますので、こちらのほうにつきましては、毎年秋口から冬にかけて学校生活自己診断アンケートというのがございます。こちらほとんどマークシートになっておりますけれども、最後のところで、現在の学校運営についてのご意見だとか、そういったことも含めて、自由記述欄を入れているということでございます。

先ほど委員がおっしゃられた教育行政に直接ということではございませんけれども、身近な学校運営に対しての意見表明というところは、そういうところで今いただいていると、こういう状況でございます。

以上です。

美濃教育長

私からもちょっと補足するならば、個々人がいうものではないかもしれませんが、毎年、子ども議会というのをやっていますよね。そこでは、例えば公園をもっと造ってくださいとか、通学路をこういうふうにしてくださいとか、なぜ何々はこうなんですかみたいな質問なり、要望なりをしてもらえる機会がございます。それは22校の小・中学校から1人ずつ代表議員を出してもらって、それぞれの子供たちの立場からの質問であったり、要望であったりをして市議会の場で、子ども議会という場で市長に対して答弁を求めたり、私が答弁することもございましたけれども。そういう形で子供の意見を吸い上げる機会というのも設けられてはいるという状態です。

ほかに何かございませんでしょうか。

和田委員

すみません。私は、正答率の関係でちょっと気になりますので質問させていただきます。特に小学校の場合は、正答率が6割に近い。算数は58.1%ですか。これは近いんですが、中学校の数学とか英語はもう4割を切っているという状況なんですよ。全国の状況も低いんですけども、このあたりまず、全体が5割切っているということについて、中学校の数学とか英語で5割近いということについて、まず、国立政策研究所、国のほうは何かそういうことについてコメントを出しておられるのかどうかというのが一つですね。だから、試験のやり方を少し変えていっているのか、何かそういうことから影響しているのかなと思って、国のほうはどんなふうにおっしゃっているのかなということと、松原の場合は特に英語、4割切っているということなので、このあたり委員会としてどんなふうに分分析されているのか、その2点お願いします。

長尾教育推進  
課長

全体の正答率の低さということでございますが、国のほうから示されている、大阪府のほうで、我々も学力向上担当者会というもので府の分析を受けることがあります。そこで言われているのは、正答率そのものは少し落ちているというのは間違いはないんですけども、注視していただきたいのは通過率と言われるものでございます。この通過率と言われるものは、70%全国の子が答えているような問題、いわゆるそれほど難しくもない問題というものがこの中に出てきます。じゃ、みんなが大体答えられるような、全体正答率が70%答えている問題を各市町村の中でどのぐらいクリアしていますかというようなことを非常にポイントとしています。

英語のほうでいうと、全体正答率が10%だとかというような問題があるので、その難しさはもちろんあるんですけども、府がポイントとしているのは通過率。多くの児童・生徒が答えている問題に各市町村でどれぐらい答えられていますかというようなことでございます。

本市の状況でいうと、ここがやはり非常にポイントになっていて、その全ての問題に対して、やはり正答率がいいというわけではございません。我々がずっと、まったく学びアシストということでやらせていただいているのは、いわゆる学力低位層と呼ばれる子たちが、皆が答えられる問題をしっかり答えられるようにしていきたいというような、そんな思いで低位層の底上げということをずっと考えているわけでございます。

それから、英語のほうにつきましては大変苦しい状況です。英語のほ

うはこれまでGTECあるいはエーゲット、それから、今年度はスピーキングクエストということで様々な施策を打ってきたんですが、なかなか問題が、正答率が上がっていないのが状況です。

先月も我々のほうからお話をさせていただきましたが、松原市の授業改善が私は遅れているとは思いません。他市の授業を見に行ったときも、それほど授業が悪い授業をしているとは思わないのですが、ただ、やはりどのように問題に当たっていくのか、学んだことをどのように使うのかということについてはまだまだ研究の余地があると思います。自分の分かったことを今度、表に出していく。もっと言うならば、その分かっている知識、技能を問題にどう生かしていくのか。様々な問題に当たっていくということがこれからは求められていく。使うという部分です。先月も言わせていただいた、出会う、つかむ、使うの部分。この部分をしっかりと授業の中で見とっていく。それはこれまでは学校任せになっていた部分がある授業づくりの部分も、市教委と学校とが授業をつくる共通言語を持とうということで、この3つの柱、出会う、つかむ、使うの部分をしっかりとやっつけていこうということで今回も使って、どのように知識・技能を使っていくのか、そういうところ見とっていきたいと、そのように思っているところでございます。

以上でございます。

新田委員

英語を使うという部分に関して、質問ではなくて意見というかアイデアというか、あれなんですけれども、何か前回かな、お話ししたかもしれないんですけども、南スーダンの方がお客さんで私のほうに来まして、僕も全然英語なんかしゃべれないんですけども、お相手さんが英語とちょっとした日本語しかしゃべれないので、グーグルで調べながら片言の英語でしゃべると、やっぱり楽しいのは楽しいんですね。その後何回も天美の駅前とかで会うので、今度会ったら何か挨拶こんなふうに言おうと思って、事前に調べて覚えておいて、やっぱり使うということはすごく楽しいし、使うからこそちょっとだけでも勉強しようかなという気持ちになるのかなと思ったんですね。

その中で、去年の何というんでしたっけ、阪南大学生の方とかが教育委員会に入られて。AIMの中でご提案されていたいわゆるALTの方とかがもっと触れ合うという意味で何らか活用できないかというような話が出たことがあったかなと思うんですけども、これは佐野委員とかにも教えていただけたらと思うんですけども、いわゆるフェスタかそういうので、いわゆるALTのスタッフさんとかと触れ合う機会とかが

あったり、それを今後つくれそうな余地があったりとか、どうなんでしょうか、英語を使うというところ。

佐野委員

英語を使うというような切り口ではないですね。あくまでも地域の人と学校と生徒というところですね。

新田委員

それは入る余地みたいな。例えば何か一つのブースとして、じゃ、英語しか使われへんブースみたいなのは、そういうのは。

佐野委員

それはあってもいいとは思いますがすけれどもね。ただ、やっぱり地域で動いていることが多いので、それが当たるかどうかというのはまた別の話なので。みんな何やかんやいうて、ご飯を食べに来よるし、くじを当てに来よるしという感じがメインなので、そこで学習系の話が来ると当たるかなという感じがしますね。ただ、そうなればやっぱりレベルのちょっと高いお祭りにもなるんやけれどもなどは思いますけれどもね。すみませんね。

新田委員

いえ。

長尾教育推進  
課長

ネイティブスピーカーのほうは、全中学校に今、常駐配置できている状況でございます。JET予定員のほうが全員配備をしておりますので、英会話としてのコミュニケーションスキルとして使うということ、ここも校内のほうでこれは常時そういう機会を設けられる環境が整ってまいりますので、こちらのほうも英語の担当者と共に進めていきたいというふうに思っているとともに、やはりいわゆる英会話だけじゃなくて、スコア的なところもしっかりと目指していかなければならないというのは、先ほど和田委員おっしゃられたように、本市のスコア的なところが全国比と比べてもしんどいところにあるというのは、これは我々、大きな課題でありますので、しっかりと解けるということと、それから使える、本当に場面、場面で話せるというようなことも含めて指導していきたいというふうに、そのように思っております。

以上です。

新田委員

この話、せつくなのであれなんですけれども、でも、何か今おっしゃられたスコアという部分でいうと、よく最近話題になっている英検2級と準2級の間にもう一個級をつくらうかというような、あるじゃないで

すか。でも、結局、英検2級を取ってもしゃべれる人は10%もないよねみたいな話があると思うんですけども、結局、スコアを上げることに意味があるのか。そもそも英語というのは最終的に本当に世界で最も使われる言語として、これを学習することが最終的にグローバルな人材を育てたりとか、その人自体がこの先衰退する日本じゃなくて、世界で活躍するチャンスを得るということにつながるのかどっちなのかという、さっきのキャリア教育の部分ともつながってくると思うので、スコアはこういったところでは当然必要やと思うんですけども、英検を取ってもしゃべられへんみたいなのが結構、既に共通認識がある中で、何かスコアというよりか、やっぱり興味、関心が高まるから自然に勉強して、最終的な結果、スコアも伸びたらというようなことの観点で、何かせつかくやから、ALTの方とかの歓迎会みたいなのをどこかでしてみるとか、例えばそこの市役所が持っている食堂でやるとか。そこで例えば英語しか使えないパーティーをするみたいなとか、何かそういうようなのも今後あってもいいんじゃないかなと思うんですね。fan、楽しいからやるというのはすごくやっぱり動機づけとしてあるのかなと思いますので、今後一つの研究課題としていただきたいと思います。

美濃教育長

ありがとうございます。  
ほかに何かありますか。

田中委員

英語に関して今お話を聞かせてもらって、非常に大事なことだと思います。どうしても我々の世代というのが受験英語的で、読める、何とか読めるけれども、何とか書けるけれども、聞けない、話せないというのが英語になっていたんですね。ところが英語というのも一つの語学で、語学というか、言語ですので、やはり聞けて話せてというのが一番の基本だと思うので、そこからやるなり、読むなりというのが発展していくというふうに思っていますので、そういった今の教育というのはもっともっと活用できることはできると思うので、その辺を活用していくべきかなと思います。

ちょっと話は変わるんですけども、この正答率、全国比の推移のグラフを見せてもらおうと、松原市としては非常にしんどいんだというふうな認識を持たれておるということなんですね。正答率も、単なる一つの山の正規分布ではなくて、二山になっているよと。そして、ボトムアップをねらっているのが一応基本的な我が松原市の教育方針だというふうにお伺いしました。

確かにボトムアップは大事です。ボトムアップによって正答率を上げようとする、全体的な正答率が爆発的に伸びるということはまずないだろうとは思いますが。ただ、とはいうものの、このグラフを見せていただきますと、中学の国語がひいき目に見て横一直線。ほか、小学校の国語、小学校の算数、中学校の数学、英語は1遍しかないんですけども、どう見ても右肩下がりに見えてしまう。ということは、今までやってこられたボトムアップの体系、授業、方針、やり方というものに何か問題があるとお考えなのか、いやいや、その過程であって、これが逆、V字型には無理でも、少しずつでも上向きになっていくんよというような認識でおられるのか、その辺だけちょっと確認したいんですけども。

長尾教育推進  
課長

経年変化を見ていただくと、右肩下がりになっているということが見えています。これは問題の質が随分変わってきたということにも由来しております。実は、全国学力・学習状況調査は、数年前まではA問題、B問題とあって、基本的な問題のA型、それから、応用的な問題のB型というもので分かれていました。実はそれがたしか平成30年だったというふうに思いますが、それが統合して1つの問題になりました。A型、B型というものがなくなりました。

それと、より応用型に少し近いような問題が出題されるようになりました。私たちの基礎的な知識理論、それから、いわゆるしんどい子たちに寄り添った学習というところでいいますと、基礎的な問題というのは割と検討してきたものですが、少しひねられた問題、出題方法が少し変わった問題、活用問題ということになると途端になかなか強みが生かせないというような状況がございます。今求められている力というのは活用力ということが大いに言われておりますので、子供たちに一つの知識というのをどんなふうに活用していくのかということではいいますと、決して今までやってきたことが間違いとは私は思わないんですけども、今後は子供たちが持っている力をどんなふうに活用していくのか、使っていくのかということこれから焦点化していかなきゃならないと、そんな時期に来ているのかなというふうに思っております。

先ほど来ずっと言わせていただいている使うということ、今後は知っているだけじゃなくて、どんなふうに使っていくんだ、そして、問題もどういうふうに当たっていくのかということ、これを学校との共通認識の下、今後は進めていきたいというふうに、一歩踏み出して進めていきたい、指導していきたいと、そんなふうに思っております。

以上でございます。



矢野学校教育  
部次長  
美濃教育長

ちょっと補足をさせてください。

どうぞ。

矢野学校教育  
部次長

今、課長からもあった平成30年のところまでちょっと、ひいき目にグラフを見ていただいているいいですか。僕らは落ちていると思っていないんですよ。平成30年までは徐々に右肩上がりで来たんやなど、僕らは自信を持って実は思っているんですよ、小学校の国語も算数も。時々、平成28の国語なんか見てもらおうと、得意な問題が出るとぽんと上がる時があるんですよ、子供たちの様子も踏まえて言うと。でも、平成25、26、27、28、29、30と徐々に力をつけてきたん違うかなと僕らは思っているんですよ。ただ、やはり新しい問題にきちんと対応できているのかということについて、今、長尾課長が言ったみたいに、A問題、B問題というくりがなくなって、本当に子供たちに新しい学力観の下、どんな力をつけていくのかということが問われるような問題のタイプに、実は松原はきちんと対応できていないん違うかというのが今の僕らの見立てなんです。

その中で、やはりきちんと授業の中でも、子供たちに力をつけていけないといけないというところは推し進めて継続してするんだけど、じゃ、もともとのようなタイプの基礎・基本を問うような問題を今やらせたらどうなのかということで、まったく学びアシストで基礎・基本の問題をもう一回全ての子供たちにやらせてみようということやらせてみると、学力、全国学力テストと同じようなデータがやっぱり出ますよ。低位の子がやっぱり取り残されているし、上位の子がちょっと伸び悩んでいるみたいなデータがやっぱり出てきたので、やはりそれは田中委員おっしゃるみたいに、低位の子のボトムアップだけではないんやなというところは僕らも認識しているし、大事にしてきた低位の子のボトムアップはやりつつ、授業の中で中位の子、上位の子をきちんと伸ばすような授業改革は引き続きやっていかなあかんというところでは、教育委員会としても、学校としても思っているという現状です。

以上です。

和田委員

そうすると、多分小学校は、割と各学校で授業研ということがきちっとやられているんですけども、中学校の場合には教科横断になってしまうので、授業研をやったとしても。ということは、市全体で例えば数

学研究会とか英語研究会とか、そういう形の横串の勉強会をやっていく必要があるかなと思うんですけども、そのあたりの状況はどうなんですか。

長尾教育推進  
課長

中学校のほうは確かに教科横断になってしまうので、研究会は市教研といって、市の教育研究会がございます。これは各教科、数学、国語、美術、技術に至るまでございますので、そこでの研究が一つの主戦場になるのかなというふうには思います。

ただ、先ほど来言っている授業の見方というのは、これはどの教科でも同じこと、共通点はあると私は感じています。確かに小学校のほうが指導しに行くのは、こちらとしても指導、私は小学校畑ですのでそちらのほうに指導しやすい部分があるんですけども、こちらのほうも中学校1校を今年度対象に、まったく学び学校アシストということで入っていきます。そこで教科なのか、学年なのか、今本当に思案しているところなんですけれども、中学校での入り込みの仕方、アシストの仕方なんかもこれからもっと研究していかなくちゃいけないというふうに思っているところでございます。

以上です。

和田委員

すみません、意見なんですけど、小学校はほぼ全ての先生が教育学校を出てきて、教育については割と幅広く学んでおられるんですね。中学校の場合にはそうじゃなくて、割と教科で来られていますから、教育学部の先生とそうでない一般の大学で数学を学んでいた方とか、理科を学んできた方がおられますので、その差というかな、教え方の差とか、そういう教育、子供たちへのアプローチの仕方とか、その差というのは結構あるかなと思いますし、結局自分が学んできた、自分が数学の先生から学んできたことを同じように次の子供たちにやっているというのが実態やと思いますので、そこはできるだけ横串の新しい学びというのをつかんでいただくような研究会というか、というのをさせていただけたらなと思います。意見です。

以上です。

美濃教育長

ほかいかがでしょうか。

田中委員

先ほどの質問というか、回答願ったんですけども、確かに平成30年以降が下がっているという、それ以降は両方、逆に上っているよという

ふうなご意見でした。

ただ、その中で、テスト内容が変わったというのは全国どこでも一緒のことですね。

矢野学校教育  
部次長

そうです。

田中委員

だから、先ほどもちらっと仰っていましたが、松原の対応がまだ不十分だったということですよ。

矢野学校教育  
部次長

はい。

田中委員

僕ちょっと気になるのは、こうしてお互い話をして、説明していただけると理解もできるんですけども、ただ第三者的に見ると、この数字だけ見ると、何これ、松原というふうな目で見られるのは当然だと思うんですよ。その辺はやはりちゃんとした構えを持って説明する機会があれば説明するなりしておかないと、どうしても数字が独り歩きしてしまうので、松原、全然あかんやないの、何しているねんというふうな話には多分どこかではなると思うので、その辺だけはお互い、我々も含めて、ここにいる皆さんはやっぱりそういった意味での注意というか、は必要かなと思っていますのでよろしくお願いします。

美濃教育長

ほかいかがでしょうか。

私からも1ついいですか。

無答率なんですけれども、無答率が、ほとんどが全国平均とか府平均よりも多いですよ。状況がつぶさに見えるわけではないかもしれないけれども、時間が足りなくて無答状態になってしまったのか、投げ出して無答状態なのかが分からないとは思いますが、でも、ほとんどでやっぱりそれが上回っているというのは何か理由が思い当たるものはあるんですか。

長尾教育推進  
課長

昨年度まで私は学校現場にいましたので、そのときの子供たちの様子なんですけど、初物に弱いというのが非常に感じられます。小学校の授業であるならば、例えば算数の公式を学んだら、それに類似する練習問題、いわゆる計算ドリルと言われるようなもので、縦長の冊子みたいなのでやるんですけど、いわゆるテンプレート型の問題なんですけれども、そういう見た目にも、こないしてやったらいいねんな、縦掛ける横割る高さ

やな、割る2やなというのが、見やすい、取っつきやすいというものに対しては、子供たちはすごく意欲的です。ただ、設問が長かったり、設問が長いというのは要らぬ情報が入っていて、取捨選択をしなきゃならない問題、あるいは答えにたどり着くまでに何段階か踏まなきゃならない問題というものがあります。それがいわゆる応用型の問題ということになるんですが、本当に子供たちは見た瞬間に、これは駄目だと諦めてしまう子供たちの姿を私は見てきました。ということでいうならば問題を使う、あるいは慣れということでは、様々な情報を交ぜ込んだような問題をあえてさせなきゃならない。あるいは初めて出会う文章に触れさせなければならぬということは非常に感じているところでございます。そういうようなワークシートも、今年度は使う予定でございまして、初めての文章に出会う、そして、頭の中で知識をシャッフルさせて回答を導き出すというような訓練は必要なのかなというふうに思っております。

以上でございます。

美濃教育長

推進課長の説明の中でも既にあった話なんですが、それはつまりは読解力をいかに小さい頃からつけさせるかということに非常に近いと思うんですけども、我々がぱっと思いつくのは読解力、本を読ませること、小さい頃から本を読む機会をしっかりとつくろうねというのは簡単に思いつくことだと思うんですが、それが今スマホとかタブレットがすごく普及している中で、なかなか活字、本を手にとって読むという機会が少なくなっている。であればそれを何とかして、逆手に取るのか、それとももっと新たな工夫をしてなのか、活字を読ませるような機会を何とか創出していかないといけないのかなとも思うんですけども。これも中ではちょっと話しましたんですけども、ぜひこの機会なので委員の皆様方からもこういうのやってみたらとか、こういうのを聞いたことあるよとかあればちょっと教えていただきたいですけども、いかがですか。突然振って申し訳ない。

新田委員

以前から何度かお話ししていると思うんですけども、私は1度失敗しているので、最初の子のときに絵本を読んであげるなんてことを全然できなかった状態で離婚してバツ一になって、今何とか自分の生活も立て直ったので、朝、保育園に行く前も絵本を読めるし、帰ってきて、寝る前も絵本を読めるし、時間をやっとなさしてくれるようになったので読むんですけども、そうすると接している時間が違うというのもありま

すけれども、やっぱりいろんなことに対して理解力が違うく見えたりとかするわけなんですよね。そうすると、やっぱりその過程にこそ読解力を高める素地は、読書という部分も含めて間違いなくあるんじゃないかなと。

なので、教育委員会とか学校教育が直接手を出しにくいかもしれないけれども、以前からお話ししているような家庭の教育力を高めるような何らかの施策、私が思っているのはすくすくポイントのような形。親が何らかのセミナーだったり、講習だったり、何らかの活動をするとそこにポイントが付与される。行動経済学でいうところのナッジ、後押ししてあげることによって家庭の教育力を高めるということこそやっぱり大事なんじゃないかなとは思いますね。

特に、今スマホでいろいろまた読書もできたりとかという話もあったと思うんですけれども、もう一つ何か、今言われている問題というのが、スマホで漫画を読む子が増えているわけなんですけれども、それが日本の漫画じゃなくて、韓国の漫画。韓国勢の漫画は縦読みの漫画といって、横に読む、いわゆる本の際とは違って、スクロールする、縦読みの漫画は席卷されていて、日本の漫画じゃなくて、韓国発祥の漫画とかに既に負けているんですよ。

縦読みの漫画はスクロールがこっちなので、結構、結論とかがぱぱっと早く出てきたりとかというのが特徴で、それはより読解力みたいなところが全然ないんです。日本の漫画の持っている、いわゆる物語的な要素とか奥深さみたいなのかでは、縦読みの漫画ではちょっとそぐわないので、もう既にそういうんじゃない漫画というものはやり始めている。漫画を読んでおいたらもうちょっと何とかなるやろうみたいな言い訳も本当に効かない状態になっているので、本当の意味でちゃんと本を読むというのに抜本的に取り組まなければいけないんじゃないかなというのはいっぱい思います。

この学力調査のところではどうしても引っかかるのは、このグラフに関して引っかかるのは、やっぱりみんな卒業していくわけじゃないですか。だから、卒業していつている以上、これは学力の調査とも言えるし、やっぱり指導力の調査という言い方もできるんじゃないかなと思うんです。生徒というか、子供たちはみんな入れ替わっていつているわけですから。そしたら、やっぱりこのグラフを見たときに、子供たちが育っていつているという意見を、先ほどありましたけれども、それは育っていつている子供がまた入れ替わっていつている。同じ子供でないということになりますから、これを見たときにやっぱり先ほど田中委員

からありましたけれども、これがいいというふうに思えない側面もあるんじゃないかというのは私も思っていて。だから、やれることとして、今までなかった新しい施策、先ほどの家庭教育に対してというようなところもやはり真剣に考えていただく必要はあるんじゃないかなというのは思いますね。

美濃教育長

ありがとうございます。

田中委員

活字をどうして読み込むかということなんですけれども、自分の経験でいうと、僕も本当に小学校、中学校、高校もそうですけれども、活字を全く読まなかったですね。唯一読むのが学校の教科書なんですよ、国語。これは読まざるを得ないですよ。だから、まずここを、ここから何か入り込めるようなことをすればいいんじゃないかなと思うんです。何か好きな本を読みなさいといっても読まないし、一番嫌いだったのは読書感想文。このやり方、最初ちらっと読んで、今、新田委員が言われましたけれども、最後の結論を読むと。最後にあらすじみたいなのを書いていますよね。あれだけ読んでやるというようなやり方をずっとしていましたね。

だから、新たに何か興味がまず、本に対して興味がまず湧かなかったもので、だから、もう読まざるを得ないのが学校の教科書なので、まず、そこに何とかのめり込ませるような、そして、楽しみを見つけるような、何かそういうきっかけというのも大事なのかなと。嫌いな人間に読め、読めといっても絶対読まないですからね、自分がそうやったから。

これがこれで年を取ってくるとまた変わりましたね。何か興味のある本をふと読んだんですね、歴史小説なんですけれども。それから、今度、逆にのめり込みましてね。同じような本ばかりですけれども、ずっと読んでいるというような人生もあれなんかもしれませんけれども。

そういった意味で、本当に読まざるを得ないもの、数学でも何でも教科書というのは読まざるを得ないので、そこから何か見つけ出すようなというのが必要かなと思います。僕も、全然読解力はなかったですね。国語は惨たんたるものでしたし、英語も惨たんたるもんやったし、そんなのでした。

美濃教育長

ありがとうございます。

新田委員

何かそれでいったら、僕は小学校の頃からちゃんと本を読んでいたん

ですけれども、今もまあまあ本を読むのは好きなんですけれども、最近、小説を書くほうに結構はまってまして、それは何でかといったら、コンテストみたいなのがありますよね。それに応募したいというのが、最近欲が出てきて結構書くんですけれども、結局それは賞金目当てなんですよ。3年前ぐらいに1回だけそれで入賞したことがあって、20万ちょっともらったんですよ。ほんで、そこからちょっとはまってしまって。ということで、松原教育委員会賞みたいな形で読書感想文コンテストみたいな、読まざるを得ないし、それに対して作文を書かざるを得ないし、結構しっかり、例えば5万円あげるとか、しっかり子供からしたら、えっとなるような、したらどうですか。あめとむちじゃないですけれども、先ほど田中さんがおっしゃいましたけれども、自分が好きだからというきっかけだったりとか、歴史のところ、この部分が好きだからとかという一つのきっかけもあると思うんですけれども、今の子はいろんな面からそういうずばり分かりやすい餌でつるといって、それも一つの考え方だと。

美濃教育長

ありがとうございます。

佐野委員

思うのは、何かやっぱり子供の気持ちになってみたら分かると思うんです。自分が小学校、中学校、何を考えていたとか。ほんなら、難しいことはパスしたくなるんですよ。それよりも簡単なことに目が行くし、だから、逆に言うたら、簡単なことをやることですごく学力がつくというような仕組みをつくらなあかんと思うんですよ。

それ一つは、歴史なんかでも、歴史は教科書で進めていく、当然ですよ。そうじゃなくて、映画を見せるんですよ。10回見せるとかね。映画やったら見よるんですよ、絶対に。それも面白い感じのアクション系なので、歴史が当たっているというのはたくさんありますよ。大体いうてみたら、映画はほとんど歴史が絡んでいたりするものなんです。ほんなら、それを見せて、その前後は口頭でもええから、ここはきっちりやってあげたら、そこは分かってくるよ。

僕、日本でいうと明治のあたりの歴史が大嫌いだったんですよ。何か大嫌いなんです。いっぱい人が来るし、何かぐちゃぐちゃなっているし、戦争ばかりしているしみたいな。でも、それが「るろうに剣心」を見れば、いや、ほんまに、そういうことなんやと明らかに分かるんですよ。何であんな悪いやつが出てんというのは、やっぱりそれまでにいろんなことをやっていたから、そのひずみが出ていたみたいな。でも、「る

ろうに剣心」を見せると、子供は絶対見るんですよ。ポケモンはちょっと見いひんかもしれんけれども、そんなふうによさしいところに入って学力がつく方法というのをやっぱり考えていかなあかんのと違うかなと思うんですよ。簡単に言うてしまっていますけれどもね、僕。でも、入り口は絶対簡単が一番いいと思うんですよ。というのが、一つの意見なんです。

美濃教育長

ありがとうございます。やっぱり動機づけとか、取っかかりをつける工夫というのは必要なんじゃないかと思えますね。それこそ、ICTポータルサイトをうまく使ってそういうのを、実際にやった事例じゃなくても、こういうのどうですかみたいな意見交換をするのも一つあってもいいのかもしれないですよ。先生の側の授業のつくり方コンテストなのでもいいかもしれないですよ。どうやったら子供たちが興味を持つのかとか、子供のことばかり考えるんじゃなくて、教える側のこともよく考えてみるのも一つの方策かもしれないと聞いていて思いました。ほかによろしいですか。

各 委 員

なし。

美濃教育長

じゃ、ないように見受けられますので、学力・学習状況調査の結果については、以上で終了いたします。

ほかに何か、ぜひこれはというのはありますか。よろしいですか。

各 委 員

なし。

美濃教育長

では、ないようですので、以上をもちまして、10月の定例教育委員会を閉会いたします。どうもありがとうございました。

(閉会宣言 午後3時58分)

署 名 教育長 美濃 亮

委 員 新田 剛志